

短歌甲子園二〇二二 田中拓也

第十七回全国高校生短歌大会（短歌甲子園二〇二二）が岩手県盛岡市にて七月二十七日（休）から二十九日（金）の三日間にわたって開催された。現在、高校生対象の現地参加型の短歌大会は宮崎県日向市で開催される「牧水・短歌甲子園」、富山県高岡市で開催される「高校生万葉短歌バトルin高岡」、鳥取県鳥取市で開催される「万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会」等があるが、これらの嚆矢となったのが二〇〇六年に始まった同大会である。

それまでの高校生対象の短歌大会はコンクール型が主流であり、応募作品を選者が一方的に選ぶスタイルが定着していた。しかし、現地参加型の大会が始まったことにより、選者と参加者の対話の場や参加者間で交流を深める場が醸成されたことに伴い、短歌の魅力が徐々に浸透していったのだろう。大会終了後も短歌創作を継続する者が少しずつ増加し、短歌を次世代へと繋ぐきっかけとなる場の一つへと変化していた。

今回の大会の最大のトピックスはコロナ禍の中で二年ぶりに現地開催されたことである。コロナ禍により大会が現地開催できなかったことが参加者に与えた影響は甚大である。もちろん、オンライン開催による移動負担の軽減等のメリットもあったことと思う。だが、二年間にわたる参加者間の交流の消失は相互理解の機会を確実に奪い去っていた。短歌甲子園出場経験者に話を聞くと大会期間中に対戦以外の場で他校の生徒と交流したことが一

番の思い出という者も少なくない。また、そうした場での情報交換を通して短歌に対する興味を高めていったという話も数多く聞いている。短歌甲子園は対戦だけでない様々な要素が連動することによって魅力のある大会に育っていたのだろう。それは他の現地参加型のすべての大会に共通している点と思う。

しかし、二年ぶりに現地開催となった本大会ではコロナ感染対策のため選手交流会は中止となり、様々な制限のある中で行われた。だが、私は確かな成果のある大会であったと確信している。それは、大会期間中に行われる交流イベントが縮小された分、作品を通して「考える」という時間が大幅に増えたからであった。

・命とはどういうものかを考える

波紋残して沈む

アメンボ 仙台市立仙台高校三年 菅本 勇馬

・心だけ十八歳に追いつかず

「自立」の蔓延る

神奈川県立光陵高校三年 小野 愛加

オトナ禍にいろ

前者は題「残」で特別審査員小島ゆかり賞、後者は題「禍」で

石川啄木賞を受賞した作品である。菅本は一匹のアメンボが死んでゆく姿に焦点を当てて、「命」の意味を詠んでいる。小野は今年四月に法改正された成年年齢の十八歳への引き下げという事実を自分の心に引き付けて詠んでいる。これらの作品を読むことを通して、参加者はそれぞれ「命」や「自立」の意味を考えたのではないだろうか。いわゆる交流は制限された大会であったが、本大会は現地参加型の大会の意義を改めて浮かび上がらせたものだと私は考えている。